

高齢者の衣生活における意識
 —日本・ドイツ・イギリス・デンマークの調査より—
 古松弥生 横田京 ○山口典子(十文字学園女短大)

目的：活力ある高齢社会を築くためには高齢者自身が積極的生活態度を持ち、自立して生きがいのある生活をする必要があると思われる。そのために衣生活はいかにあるべきか、衣服をコミュニケーション財としてとらえる視点から高齢者の意識を探る。

方法：積極的生活態度を持つと思われる高齢者を対象に1994年から1997年に留置きのアンケート調査を行った。日本は、東京近郊の友の会の女子228名、友の会の関係の男子122名。ドイツは、ハイデルベルグ在住の女子125名、男子64名。イギリスは、ヨーク州在住の女子88名、男子56名。デンマークは、コペンハーゲン在住の女子87名、男子73名である。

結果：国別・性別に検討した主な結果は次のとおりである。

- ① 全体の約5～8割が「年齢にふさわしい服装をしたい」と思っている。
- ② 男子は各国共、約5～7割が「皆の中にとけこめる目立たない服が好き」、約7～9割が「ひげ剃りは毎日する」と答えている。
- ③ 女子は各国共、約7～8割が「洋服のコーディネートが好き」、約5～7割が「自分なりにおしゃれをして他人と違う個性をあらわしたい」、約5～8割が「着たことのない色や流行を取り入れた洋服でも似合えば着てみたい」と答えている。
- ④ イギリスは、男女共約6～7割が「気が滅入っている時でもおしゃれをすると気が晴れる」と答え、4カ国の中で一番割合が高い。
- ⑤ デンマークは、男女共約5～6割が「家の中にひとりである時もおしゃれを楽しむ」と答えている。
- ⑥ ドイツ・日本は、男女共約5～6割が「他人が自分の服装を良く思うかどうか気になる」という質問に対し「気にならない」と答えている。